

# ミオヤの光

## 献身の巻

1. 献 身……………一
2. 靈 の 衣 服……………六
3. 至 誠 心……………八
4. 愛……………一四
5. 靈 の 力……………二〇
6. 欲 生 心……………二四
7. 三 心 の 關 係……………三一
8. いかにして恩寵に報せん……………三七

## 献 身

「法身 報身 應身の聖き名に歸命し奉つる 三身即一に在ます最と尊とき唯一の如  
 來よ 如來の在さざる處なきが故に、今現に此處に在ますことを信じて 一心に恭禮  
 し奉つる 如來の威力と恩恵とに依て活き働らき在ことを得たる我は 我身と心との  
 總てを捧げて仕へ奉らん 我はくは一に光榮を現はすべき務を果す聖寵を垂れ給へ」  
 先づ諸君よ。聖き同胞となりてよりは、形は人々別々なるも、同じく如來の恩寵に

よりて活ける心靈は一體なり。

献身とは、已に如來に歸命したる一念、已にもはや如來に献げたるものにてあるな  
 れども、日々新にしてまた日々新ならんが爲に、

先づ朝には、身心共に聖らになりて、如來に更たため今日も聖行に献げて身も意も  
 仕え奉らんことを祈念し、自己の物と思へば兎角私に自分勝手に身の行想も意も

一

語も共に聖旨に背きて惡徳をふるまふことに成る。已に献げたる己 思へば、自ら聖  
 旨に仕へまつる決心になりて、聖旨のまに三業を活動することになる。故にまご  
 ころに献身のいのりをなすべし。

法身としては天地萬物の實體として、萬物は法身の能力によりて生産せられ、報身  
 としては無限の壽と無限の光 即ち大智慧の光明と慈悲とをもて、すべての心靈を  
 活す處の能力なり。應身としては人の身をもて教を垂れ、または人の信心に感應する  
 力。

法身は虚空の如く、報身は太陽の如く、應身は水に映現する影の如し。報身は心靈  
 界の太陽なり。譬は太陽なき時は地球の萬物の生活々動すべき原動力なきと同じく、  
 心靈界の太陽とも名づくべき無量光如來なくば、各個人の心靈は聖靈的生活の原動力  
 ないのである。已に更生したる心靈は無量光如來の光と壽とによりて聖の生活々動を  
 うるものなれば、唯肉のみの生活なる人とは雲泥の相遠である。

三身即一とは、本から三身一體説と三身各體説との二説あるなれども、それは如來  
 の方より云はば本一體に在ますなれども、人の方よりは三身に見ゆるのである。

今は三身本體として唯一の如來なりとす。

いづこに在ますとならば、法身は宇宙精神として萬物の本體なれば、法身在ますが  
 故に萬物に秩序が整ひ理法が備はれり。太陽の光も地球の萬物を生化するも悉く秩  
 序の統一せるものは、法身の理法にてある。若し夫れならば、自分は何してか我なる  
 ものがあらう。我が五官もすべての機能も法身の理法によりて成立するのではないか  
 我が心がよく知るも、眼の見、耳の聴くも、みな法身の顯現ではないか。

報身は宇宙に遍ねく智慧と慈悲と遍在し、應身として其用功が宇宙に遍在せるが故  
 に、信仰の水澄む處には身顯現す。

觀經には如來は是法界身、入一切衆生心想中。と。  
 如來は宇宙の本體を身としてあれば、一切衆生の心中にも充滿し、内に非ず外に

三

非ず一切を周遍せる理身にしてあれば、導師は、彌陀身心遍法界、映現衆生心想中と。

經に無相法身、虚空同體なれば、其住處なし。但し衆生の中に住し玉ふと。

元來宇宙は本是如來の身心であるなれども、衆生自ら自己の生理機能をもてかやうに認むるものである。肉眼を以てかやうに見ゆるなれども若し佛眼をもて見る時は宇宙處として如來の清淨法身ならざるはないのである。吾人の肉眼はその清淨界の中に於て自から現界を感覺しつゝあるに拘はらず、吾人が見る世界もやはり法身の顯現なれば、萬物の中に法身の存在せぬ處なく、また如來の光明智慧の充たざる處なき故に、現にここに在ますと信じて恭敬をさぐぐ可きである。

如來の威力と恩寵により生活するに、また二つあり。自然に稟得たる身心との生活は、如來の法身の力と恩とにて、天地と共に生活々動するので、信仰の中に心靈が靈的活動するは報身の力と恩とによる。

吾人が宗教的信仰のなかに聖靈の生命として聖き生と善きはたらきをなすは、みな報身如來の力にてあり。

法身よりうけたる自然の身心があらうとも、報應の二身より教をうけた新らしき聖き心として生活する。心靈界の太陽ともいふべき報身の力によらざれば、ただ肉の生活のみにては、永遠の生命となることはできぬ。

如來が無限の光と無限の壽とを以て吾人を永遠の光と壽とに生かしむるは報身の力と思ふである。

この眞理がよくわかり、全く靈の生命に入りしものは、如來の中に在る身として身も心も本より如來の物にしてあれば、身心共に捧げて事へ奉る。

吾人は天地の實體たる宇宙に吾人を生活せしむべき力なくんば、いかにして活きうへぬぞ。

冀くば一に光榮を現はすとは、靈の生活に入りし上は、身に行ふ行爲と口の言語

と思想とに於て、すべての邪と悪しきはみな己が私より出づるので、如來の聖旨によりての行爲は正しきと善とにて、正義としては己を守り慈悲をもてすべての人に同情をして光榮を顯はす。

なれどもみな如來の聖寵によらざれば、能はず。私の心を献げたる時如來の聖旨が私の心となり來りてあなたに仕へまつる思をもて、今日の務を果すことを、あなたをあたへまへといひのるなり。

## 靈の衣服

人は衣服を心にもまとへり。人は生れつき煩惱と云ふ罪と汚の衣服を心に纏へり。之を自覺せずして、我慢放縱なり。この汚れし衣を抜きて、如來に清められる、其の生れ更りし時に、心靈に清淨無垢の衣服の自からあるべし。之を經に彌陀心水身頂に沐せられ、觀音勢至衣を與へて被せしむとは此意なり。

釋尊は凡ての人に我の汚れの衣を脱きて、如來に依りて聖き衣を被べき眞理を教へ給ふ。且つ自ら範を示し給へり。

釋尊の忍辱仙の時に、訶利玉の爲に惡言罵言せられ、劍を以て手足頭目を截斷せらるゝ、深く自ら甘んじて、安忍して、毫も怨恨の心を生ぜざりし如きは、是れ忍辱の衣を以て、心を覆はれ給へばなり。

我等は世尊に倣ひて、安忍の衣を被て、如何なる場合も麗しき色を換へざるやうにすべきなり。

## 至誠心（眞實の自己）

至誠心の本體は眞實の自己に在りと云へる。此自己の眞面目天真玲瓏な心の状態を至誠又眞實心と云ふ。此眞我なるものは、宇宙の根底から個人の眞髓と爲りて面を此地上に顯現したものである。

眞心は、種々の肉我の虚妄幻影の爲に覆はれて居るものの眞心は玲瓏として居る。

此自我は全く我々には眞の我でないものを我と認めて居る迷が有る。此れ即ち虚偽である。我々が唯肉我有るを知りて、眞我を認めざる間は實に迷妄である。天然の人は唯肉の組織の中に我と謂ふて、絶對根底から突出して居る眞我を自覺せず。

人間は眞實の我有て始めて人生の價値が有る。宇宙萬有の中に獨歩して存在するのは絶對と連絡して居る眞我あるからである。若し眞心が毀れて仕舞ふ事が有つたならば宇宙全體が無と成る此自我ありて大なる如來と調和する事も出来る、否調和する而已ではない、宇宙全體を此一個の個體に溶入して居る、實は融入して居る。

如來の絶對無限の光明、又萬徳圓かに備へて宇宙に徧在して在り乍ら、其まゝ此個性の中に溶込んで居る、否吾人の心中に相入して在りますのである。

眞實一個の眞性が宇宙に徧照して遺す事なく在る眞我は否定する事は不可能である。

此自己に絶對なる如來と調和し合一する方と又相應せざる方との二面が在る。眞實眞我如來心光と相應する方を眞實心と名づけ、相應せぬ方を虚假心と云ふ。

眞實の價値、

自己は眞心としては絶對大靈より分出したるに相違ない。本の本體の懷の中に無爲に眠つて居るよりは、個人として世に出で一の使命を以て世に出たのは、矢張り當籤の幸福である。然るに眞我が虚假の皮殻を自ら賦したるは迷惑の如く感ずるけれども實は道に契ふ。黄金にも鑽石が着て居る。又植物の實にも皮殻が着て居る。然して生

九

の力を發揮せんには虚假と云ふ鑽石を去りて眞金の眞價を顯はすは實に苦闘的努力であるけれども、其苦闘に依て眞實の眞價は出るのである。

人の心に虚偽と云ふ皮殻は、果が熟したる上には必ず除去捨てらるゝものである。天然の人は鑽石心を以て眞我と謂うて居るから、無我に爲れと云ふた時に非常に失望する。佛教に解脱と無我の眞理を教へたのは、鑽石を去れと云ふのである。其積極的方面には眞心を高貴な寶と爲るのである。

鑽石の儘の我身即ち無明の儘の鑽石は金を鍊出してこそ貴きものである、無明より解脱してこそ眞金の我は顯るのである。

生の眞價は無明我より、眞我を鍊り出し、眞我の力を充分に發揮する處に眞價がある。

眞我は絶對の根底より頭を地上に顯したる個體なれば、自己には無限の根底ある故に、飽までも自己の方を發揮しなければならぬ。

眞心、

眞心には必ず靈的圓滿なる人格と爲り得べき性と力を有つて居る。眞心は無限の光と壽との絶對圓滿なる佛と成る事の出来る性である。眞心には必ず結果がある。例へば杉の種子は、果皮に包まれて居る。實に細小なもので、其元素と云はば、炭素や蛋白質などの幾種の原素の結合物であるが、其が土地に播いて芽は二葉の芽から幹や枝葉も段々に發展して、順ては蒼天を凌ぐ様な大杉となる。私共の佛性の眞心も自己に在らん限り發展して、智慧や徳が圓滿に完成した曉には、無限の光と、無限の壽の中に萬徳圓滿なる佛と爲る事が得らるゝ。

果の中に核が、若し生命が無かつたならば種子が萌出る事はない。吾人の眞心佛性は順て佛と成る所の核である。此の核が生命である。此の靈の種子には自己を完成せんと欲する自由がある。自己から自發的の生成力の外に、外界から注入するものではない。種子は皮殻すべてを犠牲にして自由の束縛を破棄する。

一一

人は自己に有て居る生命と力との有らん限りを盡して、初めて自己を完成するものである。此の種子を自由に成長せしめんには、太陽の力を仰がざるべからず。吾人の佛心も、如來の智慧と慈悲と光明を仰がなくてはならぬ。光明に靈化せられて、自己の信心を完成し、蒼天を凌ぐ大木の如くに、吾々の佛性が、光明に同化せられたる曉には自己の心が如來化し終れば、光明中の生活活動が出来て来る。

真心は心の本體であるが、此心を完成せんには、如來の恩寵を受くべき信と愛と欲との内容を要す。

至誠心は形式なので、三心は内容である。眞實に如來を信するから、如來の靈應に感じ、自己と如來心との合一や靈感が得られ、而して感情には、如來を愛するが故に最親密なる關係が得られて、而して眞我が益々發育して内容が豊富に爲て如來我が有と爲り、我如來の有となりて、最も親密なる關係は眞實に愛するから来る。如來を愛樂する事、最も深厚なる時は、如來を我有と爲んと欲し、如來のすべてを共にせんと歌する欲望が、如來の完全なる如く我又完全ならんと欲せず。完成せんが爲には、一切を犠牲にする事を、自から甘じて受くる。靈我完成せん爲に、如何なる苦行も悦で行せらるゝに至る。

聖善導の至誠心者至は眞、誠は實、一切衆生身口意業に修する所の解行必ず眞實心の中に作すべし。外に賢善精進の相を現はし、内に虚假を懐く事を得ざれ。貪瞋邪偽奸詐百端にして惡性侵め難く、事蛇蝎に同じきは、三業を起すと雖も、名づけて雜毒の善とす。亦虚假の行と名く、眞實の業と名づけず。君此の如く安心起行をなす者は假使ひ身心を苦勵して、日夜十二時、急に走り急に作す事、頭燃をすくふが如くなるもすべて、雜毒の善と名く。此雜毒の行を廻して、彼佛の淨土に生せん事を求めんと欲せば此必不可なり。

### 愛

我等は如來の子である。萬物と共に如來の中に在りて、而も離れて各自が、自己獨立の行動を取て居る。然れ共我れは矢張り如來の法則の範圍内である。如來我らを愛するが故に、各自に部分の範圍にて世界を統治する權利を與へらる。

我等は如來の愛から別れたのである、如來と我等、父と子との間から分離して居るを調和するのは愛である。太陽は地球と云ふ子を分生して、常に愛を注いで子を愛する力の強きことは、求心力となりて地球を懐き抱て常に温めて居る。是の如くに大親は、我等を産出して、常に愛を注ぎて、慈悲の強き糸を以て、繋維して離れ給はず、我等を暖めて育て給はるのである。

母親が其子を可愛がつて離す事が出来ぬと云ふ事に成て居るものは、本胎内に懐て居た時には、可愛と云ふ感情も、有たわけではない。自己の胎内より分離して、我と彼との、兩體となつて、子に日々を愛を注ぎつゝある程に、其暖温なる愛情が彌増て二體同一の愛情となつて来る。自己から離れ其を完全に育て揚げようとする、愛なるものは、喜と樂との極りである。

絶對なる大靈に、如來も我等を、絶對なる自己の中に存したまは、大慈愛の心も起るなく實に冷淡漠々たる寒夜の月の獨り中天を照すのみならんに、衆生と云ふ子を自己よる分産して、而して其子等を自己の全き如く完全圓滿に育て揚げんとして、無限の愛を以て、常に一切を愛念し給ふ時に、我等子に於ても、純粹自我計りなるものは、内容も純白の形式となりて、淡い、冷い、いかに廣博なるも玄遠なるも、何の價値もない。然るに自己に最も愛戀する處の相手があつて、常にあらん限りの、情を盡して、相愛親和の濃厚なる、暖温の中に、兩性一體の情が融合し、適合する處に、生命の價値があり、自ら愛する様になる如く、人の靈性に於ても、大靈の愛の權化したる靈身の慈愛の面影を常に眼前に彷彿として、えも云はれぬ靈感の情は、實に世の

異性の戀愛のその如くにして、又プラトリーの神に對する靈戀にも比ぶべく、然れ其肉の愛戀の生理的に規定せられて熱を起すとも異にして、永遠に遷る事なく、最も濃厚に且つ暖温なる、及プラトリーよりはもつと、靈に活ける靈の血が通ひ、麗はしき面影は實に活ける靈の面であるから、我等の感情に通ひ來る響は幻影ではない、又靈なる姿色の眞實なる事は幻覺ではない。

我靈と彼の大靈愛現なる如來とは、不一不異の關係を有つて居る。若し全く一體にて彼此の相は待比的に現せる時は、其雙方の間に、最も微妙なる戀愛の心情が發動する。異性が相互間に自ら愛し合ふ情ある如く、衆生と如來との靈的愛樂は我彼と相對する處に、衆生は如來を愛念し、如來は衆生を愛念し、彼此相念の處に、微妙なる愛念の積さを感ず。然れ其彼と我との間に、最も暖なる情糸の裁つ事の出來ぬ兩體同情の、離るゝ事の出來ぬ親密なるありて、相互に繋ぎ合ふありて、靈の生命は眞價あるのである。

愛は信仰の中心眞髓、愛に依りて靈は進化す。愛は生命である。

愛の信仰は血あり涙あり生命あり。

宗教心てふものは、宗教上の眞理を悟通する處の知力に如來を認め、眞理なるを認め、其靈なる事、美なる事、その恩寵を被り、それと連絡する、またそれに依て人生の眞價を得られ、又成佛を得る事は眞智なれども、然れ共宗教心の生命たる中心眞髓なるものは感情にあり。信仰の感情にして、彼と我との融合親密なる關係とは、我は彼に入り、彼我に入り相互に満腔の同情を以て繋ぎ合ふものは、感情の中の愛である。我はすべてに超て彼を愛す。我真に愛するものは彼である。我生命の價値は彼による。若し我は彼と全く離別して仕舞とすれば我は活きん事を欲せず。彼の外に我が眞の情はないのであるとの如來に對する感情が、即ち宗教心の眞髓である生命である此彼と我との同體の愛の生命心臓から信仰の血は常に流れ出して、全身の頭から五臟六腑より一切の細胞にまで循環するものである。其故微妙なる靈性の愛は如來の靈

愛より我が靈の心臓に恒に流注せらるゝのみなる故に、如來を離れて我愛念の血の原料ある事なし。

我が愛は彼を戀念して忘るゝ事は出來ぬ。寤寐にも忘れられぬ。聖源信が「ぬれば夢さむればうつゝ、東の間も忘れがたなきは彌陀の面影」と云ふ。聖者が心情に彷徨して寤寐にも取除く事の出來ぬ處に、宗教の生命がある。大靈の愛が聖者の愛情と權化したので、即ち彌陀が源信の情となつて、全腦をせめて居るのである。血も肉も悉く彌陀の愛に漲つて居る。そこが源信の聖たる所以である。唯文字的の佛者の及ばざる處は、彌陀に依て活ける聖源信である。

聖法然が「我は只佛にいつかあふひ草心の妻にかけね日ぞなき」と如何にも宗教的天才の頭腦には、美天國が常に來現し、天樂永しえに心の耳に響き亘り、世に比なき金の相、満月の面は、見ま欲しき心の妻に、何時とてか離るべき。されば法華經に一心に佛を見んと欲して、身命を惜まざれば、其心の戀慕するに依て、即ち佛出で、爲に説法すと。

愛の信仰は益々發達するに隨つて、彌々覆はしく、初は小兒が母を慕ふ如く、いとけなき愛を漸次に増長するに隨つて、恰も青年が春期に入るに及んで、異性を愛慕するが如くに、靈性の信念は愛の權化たる如來を愛樂するのである。

其靈的感情は實に植物の陽春和氣に催される處の、櫻花の爛漫たる麗はしきを呈し覆はしきを流す頃、雄藥より分泌する處の花粉は雌藥の子房に之を愛くる時に當つて花は無情と雖雌雄感應の妙境に入つて居るのである。信仰の感情の如來と衆生との神秘融合の状態は此にある。神八合一三密冥合の其時の歡天喜地、四面玲瓏と云は、唯形容の詞ではない。全く冥合靈感三昧の象狀である。善導大師は其神人合一したる靈感を身心融液にして不可思議であると宣れた。そは三昧に入て神が如來の靈應と冥合した時の靈感の微妙なる事は、身も心も靈に融液とけ込んで仕舞ふとの義である。

かゝる妙味靈感を經驗して初めて宗教の玄深を味ふた人である。

二〇

## 靈の力

空高く理想の靈なる影は、心眼で眺むる天高き雲間より日の輝きをきら／＼と閃き來つて心の髓からえも言はれぬ靈感を覺ゆ。

靈の力、自然科学のエネルギーの不滅を力説する。蓋し、力はよしや表に現はれて居なくも伏在して居ると。此の理は宗教靈愛にも應川する事が出來ると思ふ。一度愛の權化なる靈の面影に接する上は、其靈なる力は永劫に腦裡に伏在して、其念ふに隨つて現はれる。

西に入る日の天の麗しき光を擽めてきら／＼と射發する光の方に、心眼に見ゆる靈の聖容は眞金色にして圓光徹照し、其の端正なる事比なきを感ずる時は、是れ靈感の極みに覺へらるれ。ダイヤモンドに日光の映射する如くに我等が信念に如來の靈應の光は輝きて映す。我々は此の靈境に進み入る時に、最早娑婆の人には非ず。一躍超人の境に逍遙ふのである。すべての聖人の神の栖み遊ぶ靈界である。此の閃きは實は野にも山にも何れの處にも到る處に充滿してゐる。只此靈應を感じ得る能力だにあらば、我らは此大なる閃光は我らが靈を温める力である。

愛てふ不思議なる力は、對象なる物を自造的に見得る。色目鏡を以て向ふ處に有色を見るが如く、例へば戀／＼合ふ仲には痘痕も膈と云ふように、其を戀愛する彼は、自ら美化して見ゆる。宗教的の靈なる愛にしてもそうである。如來妙色身、世間無與等無比不思議、なので、すべてに超へて如來を愛慕する我等が信仰には、十方世界に我が愛する如來の權化ほど麗はしき妙容、妙しき靈姿はない。表から觀ても、裏から思ふても、我愛する如來の靈容に、比類すべき物はない。故に我は一切に超へて彼を愛する故に、我は彼を以て我が生命とす。故に我は彼と共に在りて、永遠に離るゝことを欲せぬ。彼と共に住する時は、到る處極樂園である。宇宙の一切の歡樂、一切の光

二二

榮、一切の福祉は彼が有する處である。故に彼と共に在る心情に、無比の歡樂、無上の光榮、無限の福祉は實現するのである。

二二

人間生活に於ても然であらう。已に地上唯一として絶對的に愛する異性が有ると想へ。然る時に彼は其の最も愛する異性を我有とし、而して之と共に居る事を以て欲望とす。彼はそれを離れて生活せん事を欣ばず。然るに彼は其戀人とはいかなる水火の中にも厭はずして彼と共にせばいかなる苦も自己の愛能力に依りて樂化して感じらるゝのである。

若し如來を愛戀し、如來と共にする時は、何處に於ても極樂ならざるはない。何時にても淨土である。いかにとなれば、自己の最愛なる如來の靈應と共に在る時は、自己の感情、自己の全心が満足である。無上の満足である、此無上の満足を感ずる時は焉ぞそれ極樂ならざらん。

自己の心に無上の満足を興ふる人と共ならば、田園生活も天國の生活よりも樂しい。若し如來と共になれば如何なる處か極樂ならざらん。故に如來と共に在れば地獄の熱火も變じて樂邦と化す。我はすべてに超へて如來を愛する故に彼と共に在る神は何時も極樂ならざる處はない。世に極樂の樂しさを欲望するから、彼土に攝取するが故に、如來を信念すと云ふ如きの安心は、まだ眞實に如來を愛する信にあらざ。若し眞實に己の生命として如來を愛する信仰には、若し如來と共にならば假令地獄の火中をも寧ろ悦となすと云ふ如き安心にして、實に始めて如來を愛する信仰である。腦髓は云ふまでもなく、神經も、血液も、筋肉も、毛孔も、一切の細胞も、悉く如來の愛の充滿せぬ處なく、我は彼の愛に充たさるゝが故に、我は全力を注ぎて彼を愛せざるを得ない。我が生命及至精神は悉く彼の愛である。彼の愛を離れては我は無である。我が血は彼によりて循環す。かくまでに深密な關係なる愛する彼と共に永遠の樂園に在らんことを以て我が生命とす。

二三

## 欲生心 (意志の信仰)

二四

宗教心最終の希望、先に感情にては如來を愛し愛が信仰の中心眞髓とし如來心と融合し如來と共に在る身とはなれり。意志の欲望。

欲望と欲生との二義。欲望とは如來光明中の生活行動の希望にて欲生は生きんと欲す即ち光明生活。

永遠生命の希望である。人には欲望あり、志願あり、それが爲に我を忘れ力を竭し働く事が出来る。

生きんと欲するは生活欲。この欲生の慾に二種。一は榮養、二は生殖に例ふべき欲望あり。甲は願作佛乙は願度衆生心なり。

### 愛と欲

感情の信仰は愛にて如來は衆生を愛し玉ひ衆生は凡てに超えて如來を愛慕し奉る。

人は其最も愛する相手に對して深く愛慕し戀念して止まず。然る時は其愛を充さん爲めには愛求が起らざるを得ず。即ち愛する者を我有にせんと欲す。其と共に然んと欲す。同栖せんと欲す。愛する者と全部を同一にせんと欲す。肉體の相愛の然る如く靈の愛に於ても亦然り。

如來の大慈愛心と融合し如來の爲に愛せられん事を欲す。我如來を愛する如くに我も亦深く如來に愛せられん事を欲求する如來と共に寤寐にも離れざらん事を望む。如來は我有にして我亦如來の有である。

最も愛する故に凡てを同じからんと欲す。如來は聖徳圓滿の故に我も亦如來と等しく萬徳圓滿に同化せん事を望む。我は如來に由つて生く。我がすべては如來の物である。

如來と淨土。我は如來と共に在らん事を欲す。如來在す處即ち淨土である。故に我に如來來る時我淨土に在るなり。淨土は私の汚染なる心の觸るる事能はざる處淨

二五

土格るとき我心は清くなる。我如來に清めらるる故に我清淨土に在り。如來の清淨を觀る處に於て凡夫自ら不淨を見る。

### 欲生

二六

如來清淨なる國に生ぜんと欲望は如來と共に在らんと如來の完き如く完からんと欲望である。如來の在ます處を、通じて涅槃界と云ふ。又極樂又神の國等の種々麗はしき唯光榮と靈福との充ち満ちたる處、眞善美妙愛の極れる處、諸の聖人の安立する處、之を涅槃と云ふ。即ち衆生が心靈開發して終局に達する處、之が即ち人生の歸趣する處、爰に達せんことを欲望す。人生の歸趣即ち神と共に在る神國、又如來と共に安立する涅槃、同體W名に過ぎず。釋尊人生歸趣の極致を究め自ら永遠安穩の淨界に安立して一切衆生を同じく涅槃常樂に誘引し王ふ。此永遠大生命、無量壽に達せん事を宗教的に彼の我國に欲生と云ふ。我國とは大我涅槃の淨界である。

涅槃に二種あり。有餘と無餘となり。

已に人が天性の小我小生命の我が滅して大我永恒無量壽に歸入するを有餘涅槃と云ふ。有餘とは此心靈が依止する處の此肉體を云ふ。此肉體を有ち作り神は絕對靈界に安住する事である。佛陀釋尊菩提樹下に於て朗然として無明の夢醒めて正覺の日明かに照り渡る心の状態故それを宗教的に彌陀光明中に安住する處と云ふ。

然れば即ち信仰の目的は小我生命より大我の我として自己が即ち絕對の一員たる事を自覺し、而して大我と融合し自己の生命の核の轉じて靈的生命、靈的の人格の核が形成したるものを靈格と云ふ。人格が一變したる處は正に淨土の人格である。身體は前と異ならざるも、釋尊は云はずもがな、一切の聖人は已に從來の小我が滅して永遠の光明中の生活に入たる靈格である。宗教の目的は精神的に諸の聖人の如くに靈的圓滿なる人格たらん事を目的とす。然れども精神には更生して靈的生活即ち光明生活に入れるも身體は矢張り寒熱に苦まざる生理上の苦惱を脱する事能はず。然れ共、精神にして全く一變したる曉には心は淨土に栖遊ぶ、此を有餘涅槃と云ふ。

二七

即ち肉體を持ち乍らに精神は淨土に安住するなり。無餘涅槃とは精神即ち理想は如來と共に淨土に安住すれ共身には世の束縛が有るのが、已に肉體を抜出づれば是迄精神的に理想的に安住したるが正しく清淨國土が實現し來るなり。

絶對の大靈界は永劫本然、常樂我淨、萬徳圓滿の處、一切の諸佛の安住する處、吾人が人生の目的とするは此處にあり。其を宗教的に極樂淨土に往生すると云ふも同じ事である。

願生心二義

願生、即ち欲生我國に二義あり。願作佛心。願度生心。論註に唯彼國に受樂無間なるを聞いて樂を食はる爲に往生を欣ふは不可なり、一切衆生を度せんが爲めなり願作佛心の爲めの故に有佛の淨土に往生を欣ふなりと。以是は願之、往生を願ふに二心あり。願作佛心と願度生心なり、願作佛心とは願は我佛に作んと欲望なり。佛は完全無缺の靈格、智慧道德共に缺く事なし。如何にせば佛の如く圓滿なる靈格と成る事が得らるるか。佛と衆生とは父と子である。例へば世間の人に於ても親に縁らずして子は生る事も成熟する事も不可能である。衆生心が佛を父とし已に如來を信じ聖徳を表せる御名に由つて一心に信念して止まざる時は信成就して己は如來の聖子たる事が確信せらる。二、願度生心とは一切衆生を濟度せんと望みなり。

信樂欲の關聯

人心を智力感情意志と分類するもの本一體の心である故常に離れざる關係がある。然れば如來を信認すると、又感情に如來を愛樂し意志に如來の空き如く人格を完うせんと欲望と心的には連絡して居る。

信仰の要旨とする處は人生の歸趣たる、高等なる人格、即光明中の人即ち靈格を成すには、大靈の慈父なる如來を信じ如來の靈光に仄に接して始めて聖子であるとの自信が出来る。故に信が益々進み中心眞髓に入つて如來全く感情的に我有と成り如來が我生命になりて即ち愛の信仰である。故に愛は信仰の中心である。如來我有となり

如來の空き如く我亦聖子として空からん事を欲望し、道德的に靈格を形成するために志勇猛精進にして最善の努力を竭し如來光明によりて聖子として己を圓滿に到達せんが爲に向上的に力行す。之が終局である。信樂欲は信仰の根本的人格を形成するに根本と中心と終局とにある。

若し之を植物生活に例せば、自己本來は佛性が心田地である。若し宿善濃厚なるものは其植物に適當したる沃地である。其沃地が、己に己が従前の肉の生活のみの非なるを自覺し、且つ肉の己が闇と惱と罪垢の我なる事を自覺して、靈の生命に入らんと欲望起る時は、如何にせば靈の生命に入る事を得るのであらう。若くは御經を披閱し若は師友善知識の教示によりて靈の生命信仰の種子を開得る。即ち如來の聖徳を表しける光明名號を聞いて、如來は大慈父なり我を救ふ者慈父の外ある事なし。世に父母に藉らずして生育する事能はざると同じく如來の慈父は譬へば太陽の如く一切生物之によつて活くる如く如來は靈界の太陽なり。

三心の關係

人の精神が智力感情意志との三分類と爲るも本一の心である。然れば信仰の信と愛と欲との三心は、智情意の三類の心理なれば三心と云ふも一心の三類なれば、三心は不可離の關係を有つて居る。

然るに道に入るの第一歩は信である。即ち如來の實在を信認するが故に、進んで信仰の實生活に入らんと欲するの意志も發る。されば經に「信は道源功德之母」と。道に入るの源は信にある。一切の宗教上の功德も之より生ず、故に功德之母とす。又佛法の大海には信を以つて能入とす。如來の實在を信じ而して其實力を被りて自己が解脱、若しくは救濟を得らるゝものと信するが故に熱誠に解脱の道を求むるのである。初めて如來の實在、又は絶對唯一の靈格たる事自己の慈父にして必ず我を愛護し救濟し給ふとの眞理を聞く時は、人には宗教衝動なるもの有るが故に、如來に對し歸命信



類の心が生ず。初は一向に仰信する。其信頼の念が感情には歸命信類の念となりて、如來を愛慕する事は恰も子の母に於けるが如くに依憑の念が勃興す。

此母子的關係の如きの心は愛の感情にて、小兒がすべてに超えて唯志母の恩愛を愛慕する事、又母が子を愛することの親密なる感情に於て子は母の慈悲の乳に哺養せらるゝ如くに、感情の信念は増進して、次に愛の信仰は初に子が母に對するが如きの感情よりは進んで、子も青春期に至れば、母の手を離れて異性の愛に遷るが如くに靈的

感情も一ら如來を愛慕する事は異性に對する情に等しく、謂ゆる一心に佛を見んと欲して自ら生命を惜しまざれば、佛即ち出でて爲に説法すと。是は靈的戀愛の最も頂

點に達したる状態である。已に此愛慕の感情と伴ふものは其愛慕するものを我有とせんとし、其と配偶して同棲せんと欲するの望である。

愛の光り、充ち溢れたる陽光に充たされたる運は争でか開かて居られよう。此運は私共の心靈である。靈界の太陽なる如來の悲愛の光に満されて開かれたる花がいかにも奇しき薫も放つも矢張り悲愛によればなり。

花はいかに嬉しいでしょう其色皎潔にして其馥郁として香しい。東の天を仰いで陽々たる麗日を宿したる蓮の日輪の暖きに抱き懷かれて満腔の慈愛に日花の心性は高潮に達し、花は靈感を今更に感じて凝乎と見交れば陽々たる光は心の花の中に融け込んで愛の光が輝きて四面玲瓏と歡天喜地の花は六合に照り輝ける太陽を全く我が有として、又我が全存在は全く恍惚境に融け入ってしまった其時に、我が靈魂は云はずもが

な皮膚も神經も血液も、一切は唯靈と合致して宇宙全體は我に融合して我は宇宙全體に廣がりて遺る處はない。

人信心已に成じて彌陀の心光に映射せらるゝ時は身心、共に靈德に充され、其恩寵が意志の爲めに偉大なる力となり、また感謝の情となりて喩へば機關に水を入れ火を

燒く時に蒸氣を發して機關車の力と爲るが如く、人が信仰の心に如來恩寵の火を加ふる時は感謝の心意禁し難く、それが活動の力となりて聖意の在る處に働く力と成る。

之れが即ち靈に満たされたる人の道德的行爲の原動力である。

吾人は絶對なる靈光の内に無限の靈感を得れば斯る恩寵に動かさるゝ時は苦を感ずることなくすべての行爲に喜びと感謝が感じらるゝ。吾人は如來の聖意を實現する爲め

の生命である。故に生命の有らん限りは聖意の現はれに努力すべきである。

如來の慈悲に充され、苦もかへつて樂化し、自ら常に慈愛に充さるゝが故に、また他のすべての同胞に對して同情心に富む。他人の苦を我苦とし、己が靈に充されて安きが如くに、又他人を安からしめんと欲し、如來の正義が我心を通じて公平正大無私無偏の意志と顯はれて徳となる。

自己の靈德を發揮せんが爲には益々勇猛にすべての行爲に突進せよ。人の身心は精修するに随つて益々靈性は發揮する事は世尊が世々に道の爲めに精練したるに倣へ。

靈的生活を皆植物生活に例して説明す。

活ける信仰には植物の生活と同じく種子の萌發し漸次に増長して華咲き實を結ぶに至るまでの過程の形式は同じ様である。今暫く植物生活に例して、心靈生活が萌發する即ち喚起より體現に至る行程を説明せんに暫らく三階を立て其階位を示さん。

一、喚起。植物の種子の芽發するに例よ。

二、開發。樹莖枝葉繁茂し華の開發に例よ。

三、體現。實の成熟するに例よ。

一、喚起。信心喚起の心行を植物生活に例するに、先づ喚起の因縁とは、因は衆生本眞の心性、即ち植物の種子を土地に播下するに例へ、縁は種子に雨や氣候を與へ芽發の助縁と爲り、又肥料等の培養に例よ。

喚起の因縁、人の心性の本地に遠因と近因の二因あり。遠くは一切衆生悉有佛性とて、人々に悉く佛の種子を播くべき心地を有す。近因とは、人々の天然の資性同じからず、佛敎にて之を宿因と云ふ、世間で遺傳素質と云ふ、信仰に薰染し易き性質を有

て居る。地質に硬地と沃地とある如くに信仰の素質の富豊なるものは沃地の如くである。

靈の種子如來の萬德豐備せる真理を聞いて、其真理を了得するを種子となす。

商無阿彌陀佛が靈種子である。此の光明名號が信仰の種子となるは、例へば杉の種子は之を科學的に解剖すれば、炭素等の原素の單純なる物であるが此の種子には終に大杉と成り得らるゝ、性分がある。斯くの如く光明名號の種子には、彌陀の萬德圓滿なる如くに成り得らるゝ、性分を有て居る。杉の種子は必ず大杉と成り得ると同じ事である。

此種子を吾人が佛性の心地に播布するに、業障懺悔の要あり。衆生の心地は本沃地の如くなるも、我痴我慢等の煩惱の雜草が繁茂して心地が荒蕪して居る。此の我見我慢の荒蕪せる自我の甚だ非なる事を自覺して改悔懺悔の信念が起る。

### いかにして恩寵に報ぜん

聖典に如來は是法界身にて在ませば、靈なる身と心とは所として遍在せざるなく、一切衆生の心想に入り玉ふ也。きよき吾友とちよ。如來永遠の靈的電力は一切處として遍在せざるなし。電燈機だに設置せばいか成る處にも其靈光は發現せむ。若し光明我が身心に在して益熾盛ならしめんと欲せば只須らく一心に念佛すべし。若くは冥想觀に神を凝し、または口稱三昧に精神を投すべし。必ず三昧發現せむ。三昧とは如來靈光と衆生の身心との一致する處なり。即ち一切處に遍在せる如來の一大靈力の靈電が衆生心に發現するにあり。

如來は宇宙一大靈電の原動力なり。即ち發電所なり。故に永遠に盡くすることなし。一切衆生の無量千萬億の衆生に一時一念に發現すとも、増さず減らず。永遠なる如來の靈的電力は此地球上に人格發現としては釋尊の光顏巍巍姿色清淨の靈妙現象となり、

また大唐の善道大師の熾なる教化と現はれ大師念佛すれば一返毎に一の化佛と現じ、また法然上人の圓光となり、乃至古往今來すべての靈界偉人の靈的活躍はみな是宇宙に遍在する一大電力の發現ならざるはなし。如來の靈力は我らをきよめ、死せるものを復活せしむ。我靈は如來によりて活く。若し太陽の力なかりせば地球の一切生物は若しは動物若しは植物として生活すべきあることなきがごとく、若し如來の靈力なかりせば人類の靈的生活あるべき理なし。吾人は如來によりて靈化せり。若し如來を離れば吾靈なきなり。如來の靈力と連絡せる吾人の心の奥には無限の泉源より湧出て靈的生活をうるなり。

如來は御親なり我は聖子なり。如來と我とは精神の最奥に於て最親密にして不可離の關聯を以て結合せり。此連絡はたとひいかなる魔力を以ても之を切斷すべきものに非ず。

如來吾が信念の奥に入り玉ふ。我は如來の聖懷の中に入る。入我我入即ち如來の恩寵は我人の胸中に存在して常に靈的暖潤を發し、我は如來の恩寵の懷に在りて歡喜禁しがたし。慈悲の溫容は寝ても眼前に在まし、なまけ深き面かけは覺めても忘れがたく、朝な夕な佛を懷きて起き、夜な夕な佛を抱きて寝る。あゝいかに慈悲深重なる如來なるよ。まことに一切の處一切の時として毫も縁せざることなきが故に、如來の慈悲をば無縁の慈悲と名づく。我らが愚に淺まし、如來の深き慈悲常に我にあるをわすれて動もすれば地獄の炎のごとくに忿怒を發す。しかるに如來は我を宥めて涼しき風の如くに我を救ひ玉ふ。我は嫉妬慳貪は餓鬼の業なりと口に言ひつゝも縁に觸れては好んで餓鬼道に入らんと欲す。如來は我を覺醒せしめてきよき道あるを示し玉ふ。我々常に牛馬の草と水との食のみを求めて餘念なきが如くに、只形のかてのみに著して高き志氣なきに如來はいと高きに我を導き玉ふ。我は瘦せたる犬の餓えて餌を求むるが如くに世の事にのみ飢えてかてを望む。しかるに如來は我に靈の喰のいと珍味なるを味はしめて我靈を飽かしめ玉ふ。我は己が無智無力なるを自から覺らず

智あり力ありとおもひ、しらざれども知り顔に、出来ざるをも能ふごとくに、偉からざるに自分偉いかほをなす。しかるに如來は我を照して自己の無智無力なるを自覺せしめて、ます／＼明きに進むべきを示し玉ふ。

我は此肉の煩惱に於てこそ健全なる發達を遂げたる健士たるも、靈に於ては實に幼き稚兒なり。如來の保母によらざれば獨り歩くこと能はざるなり。我躓くときは如來は我をおこし我をたすけ、我危險に臨みては如來は其の殆ふきより我を引き出し給ふ。我は實に氣まゝものなり、順境に立てば忽ちに我慢をつのり、逆境に遇はゞ忽ちに志氣萎微して色を失ふ。しかるに如來は順境にも驕るべからざるを覺らしめ逆境にも陥るべからざるを教ゆ。若し我厭世想を起し死なんとせば如來は娑婆に即して淨土あるを示して我をこのまゝに淨土に生せしむ。

我らが迷の身、五里霧裡、謂はゆる一寸先きは闇の世にありて、實に殆ふきものなれども、如來は常に大安穩の道に我を歩ましむ。我中途にして自分勝手のみちに迷はんとすれども、如來は我を覺らしめて終局の目的地に向はしむ。我はいかなる言を以て至れり盡せる我が大ミオヤの慈恩に報せん。いかなる思想を以て此無限の徳を謝せん。

善導大師は『自ら信じ人を教えて信せしめ乃至大悲傳へて普く化すこそ眞に佛恩を報ずとなす』と録せり。しかれば吾人は自分深く信じ而して自己の信を其まゝに他人に展轉して傳ふ。其信を傳播するの其理に於ては即ち自己心中の奥に靈的活躍し在る靈の光明を其まゝに同胞等に傳燈するにあり。自己が至誠熱注して其靈光を他に點す。自己此靈によりて靈活し我信念の生命となれり、自己の靈の生けるごとくにまた他人も同じくならしむ。自分恩寵と感ずることくに他人にも恩寵を感せしむ。しかる時は他に傳播につきてはむつかさし問題を要せざるなり。只まつしぐらに自己の信念を以て他人に傳ふ。

此につきて一人の我に二面あり、肉の我と靈の我なり。肉の我は十人は十人其形を

別にす、しかれども靈の我は悉く同一の大なる我の如來を本元とす。此本元なる如來の靈が各個人の心靈に顯現して心の命となり、靈的活動の本と現はる。自己心中に燃えつゝある靈の燈光を他にうつす外に生ける佛法あることなし。自己と同しき靈を幾人も出すにあり。

自己の靈は如來によりて生けり。若し如來を離るれば我なきなり。如來によれる靈は如來につづきて、一切の信心ある無量千萬の衆生に連絡す。

吾清き友よ。自から益々向上して而してのちに展轉して他に普く傳へよ。是即ちまことに大悲に報せん心なり。吾きよき友よ。きよき同胞よ。大ミオヤのみひかりにともに報せむ。ナム。

大正十四年三月二十日印刷  
 同 廿五日發行  
 誌代年七冊一圓二十錢(郵稅共)  
 年十二冊二圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成  
 發行人 山崎 辨成  
 東京市小石川表町一〇八番地

印刷人 中橋 昌平  
 東京市小石川區水道橋二ノ四四

發行所 ミオヤのひかり社  
 東京市小石川區水道橋二ノ四四  
 電話東京六六八五一番